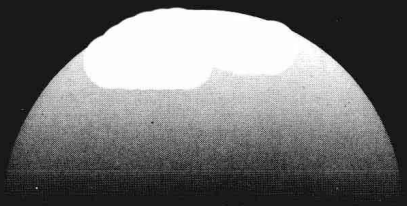
小説太平洋戦争

1

山岡荘八

# 小説太平洋戦争

十二月八日前後



講談社

新装版
小説太平洋戦争 1 十二月八日前後
昭和五八年八月五日第一刷発行
定価七八〇円

著者—山岡荘八 © 一九八三 藤野稚子 Printed in Japan
発行者—加藤勝久
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二 電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社 製本所—株式会社国宝社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
ISBN4-06-187271-0 (0) (文二)

# 執筆を終えて

山岡荘八

私が、この「小説太平洋戦争」を書き出したのは、昭和三十七年からであった。それから足掛け十年、昭和四十六年の九月まで、毎月四百字詰め原稿用紙で四十枚位ずつコツコツと書いて来た。掲載雑誌ははじめ「講談倶楽部」であり、それが「小説現代」に引きつがれた。月刊雑誌に十年間にわたる長編の連載を許されるということは、作者にとって、まことにありがたい稀有の仕合せであったと云わなければならない。

とにかくこの戦争は、数千年の歴史を持つ日本にとっても、日本人にとっても、始めての経験であり、その最初の発端は嘉永六年（一八五二年）の黒船渡航以来の転変にあったと考えなければならない大変な戦争であった。

しかし、そうしたこの戦争の根深さは、直接日本がこの戦争に突入した昭和十六年十二月八日の時点では、一文学青年に過ぎなかった私には、何うにも解きようもないものだった。

支那事変にしてもそうであったが、私や私の隣人たちは、予報なしにいきなり大暴風雨の襲来に出遭ったような狼狽で、ただその時々のニュースの周囲をウロウロしてゆく始末であった。おそらく大多数の日本人がそうであったのではないかと思う。

問題の東条内閣が成立した昭和十六年の十月十八日には、私は二度目の中支方面の従軍を終り、武漢三鎮から南京を経て上海に辿り着き、そこで長崎行きの連絡船を待っている時であっ

た。

険悪な国際情勢はよく呑み込めず、第三次内閣を投出したという近衛さんの進退に小首は傾げてみたものの、それが太平洋戦争に直接つながる動機になろうなどとは、思いも寄らなかった。

ところが、それから五十三日目、十二月八日の朝、文字どおり寝耳に水を注ぎ込まれた想いでラジオに叩き起されることになった。

戦争というものが、すでにどのようなものかは私も少しは知りかけていた。殺人という平時最大の悪業が、殺し合う人々の間には直接何の恩怨もないというのに、国家の名で堂々と行なわれる。その殺人の量が功績となり、忠誠心を計るバロメーターになって勝利者が決ってゆく……というような不思議なルールの現実が、どうしても私には納得出来なかった。われわれの棲んでいる世界は、そのように野蕃な矛盾をかくし持って文明を偽装していたのだというおどろきに、良心の戦慄を覚えながらも、十二月八日の時点では、正直に云って、私は一種の武者震いを感じた。

数度の中南支従軍で、日支事変を終らせないものが何であるかということだけは、薄々感じていたからであろう。

日支事変を泥沼へ追い込んでいるものは、決して近衛や東条でもなければ蔣介石でもないようだった。両者が握手しそうになると、列強の間から援蔣の手が動いたり、原因不明の不思議な事件が突発したりして戦線は思わぬ方向へ拡大する。前者の主役はアメリカとイギリスであり、後者には世界赤化をめざすコミンテルンの手が動いている、ということだけは気付きだしていたが、それがそのままアメリカもイギリスもソ連もみな敵に廻して戦わなければ、解決の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

道はないなどとまで考え詰めたことはなかった。
こうして十月下旬に上海から東京へ帰った時には、もはや戦争はわれわれの頭上で決定してしまっていた。私は陸軍に召集される代りに海軍側に徴用され、報道班員として従軍させられるように決っていたのだ。
正式に徴用令書を受取ったのは開戦直後で、私は三十四歳という働き盛りなのだから当然であったと思い、こうなれば日本人として生死すべきだと覚悟を決めた。
私はわが家を出る時に、先ず、自分の位牌を作って仏壇の片隅にかくしていった。その小さな位牌はいまもわが家の仏壇に入ったままだ。黒塗りの表に白絵具で「釈荘八」と、自分で書いてある。養父が真宗の僧侶だったので、戒名など自分で付けるに限ると思った。自分で自分は死んだものと決めて出てゆかなければ不安だったのだろう。戦争は何度も見て来ているので、戦場の現実は幾らか知っている。ここで自我と闘っていたのでは自分から不運を招き寄せる結果になる。そう私に思い込ませるほど、私の見て来た戦場では、個人の意志や感情や計算は、余計な重荷の別世界であった。
味方でないものは敵であり、生か死かがまことに無造作に反覆される。命令が一切の行動規準でありながら、生命を惜しんでいる者の方が、眼に見えない何者かに狙い撃ちされているような気さえした。
そこで私は、先ず自分を自分の手で殺しておくに限る、と思った。自分の方から先に死んで出てゆけば気は楽だと思ったのに違いない。
こっちは非戦闘員なのだから、直接戦う人々にはまことに生意気な横着者に見えたであろうが、しかし、私はこれで救われたとも思っている。死んだ者がやたらに腹を立てたり怖えたり

するのはおかしい。この反省がつねに心と行動の支えになった。

私は最初にサイゴンへ飛び、そこからシンガポールの陥落前にタイ国へ入って、陸軍南下のあとを追って、最初の木炭列車でバンコックからマレイに入った。そしてシンゴラ、コタバルを経てピナンの海軍基地にわたり、ここでシンガポールの陥落を見届けた。

こうして太平洋戦争と直接かかわりあいを持ちだして、昭和二十年の十月十五日、参謀本部と海軍軍令部の廃止が決定した時に徴用を解かれた。

この日軍令部に呼び出されて「金一封」(五百円入っていた)を頂いて、本日限り日本に軍隊は無くなったと云われた時には、覚悟していたことながら、すでに亡い多くの人々の面影が思い出されて、それこそ、とめどなく涙が流れた。

その日は十月には珍らしく暖い晴天で、灰燼に帰した大東京の空は限りなく澄んでいた。

私は、この日はじめて、廃墟と化した道筋を、丸の内から銀座に出て、更に浅草までとぼとぼと歩いてみた。

浅草もまことにきれいに焼けていた。が、雷門の焼け跡に来てみると、僅かながらすでに露店が出ていた。鍋、釜、食器といった、生きるために必要な最小限の日用品がポツポツと売られだしていた。これが戦前の生活に還るのは何時のことであろうか……? そう思うと、その前にかがみ込んでいる人々も、青空の下で客を呼ぶ人々も、云いようもなく哀れで無力なものに見えた。

私はこの日、金三百円也を出して、マッチ箱ほどの大きさのタバコの火付けを買っている。クローム線をほんの一センチほどつけた電熱器である。マッチが不足して困っていたので、これでタバコに火を点けようという下心はむろんあったと思うが、それ以上に、その日貰った五

百円で、何か永久に残る記念品を買っておきたかったのに違いない。
それにしてもマッチの代用品が、数ヵ月分の生活費にあたるほどの、三百円にもなっていようとは……しかもこれはわが家に帰って使ってみると、電圧が低くて使いものにはならなかった。
私が、死んでいった人々の後を、自分も追おうと考えて、鹿屋から沖縄の空へ見送った特攻隊員の最後の署名帳を携えて、恩師長谷川伸先生の許を訪れたのはこの電熱ライターを買った数日後であったと思う。
私は署名帳を先生に預けて死ぬ気であったが、先生はそれを一目で見破り、私が署名帳を差出すと、これを白ちりめんの帛紗に包み直して、私に突き返された。
「――これを大切に活かすのだね。それが生き残った者の勤めだろう」
声は優しかったが訓戒は手きびしかった。こうして私は、私の位牌を秘めた仏前に、突き返された署名帳を並べて納め、日々それと対面しながら戦後の右往左往の中で生きなければならなくなった。
戦地から続々と友人達が復員しだした。死んだと思っていた人がひょっこり帰って来たり、生きていると思っていた人がとっくに死んでいたりした。生きて戻った人も死んでいった人も、みな善良で忠誠な同胞であった。
その中で私が一番辛かったのは、占領軍が日々ラジオで語りかけて来る「真相はこうだ！」という独善放送であった。
日本人のすべてがどのように巧妙に大本営や軍部に欺され、踊らされていた愚民であったかという放送が、これでもか、これでもかと、つるべ射ちに撃ちかけられた。

私に、私の任務はまだ終っていなかったぞと悟らせてくれたのは、この放送であったといってよい。

しかもあの広大な戦域のあちこちから、廃墟と化した母国に辿り着いてくる人々は日々の生活に追いかけられ、肩をすくめてこの悪罵に似た占領放送に耐えている。それだけではなかった。それと並行して進められているのがあの東京裁判という、始めから筋書きの決定していた子供だましの田舎芝居であった。

それにもう一つ、直接執筆の動機をなしたのは、国内にあった人々は云うまでもなく、広大な戦域に散って戦わされていた人々は、個々のおかれた戦場の実情はわかっていても、どういう関連で自分たちが、あのような苦戦を強いられなければならなかったのか？　どうして日本は敗れてしまったのか？　誰も的確には摑み得ないまま、みじめな敗戦生活を強いられているということだった。

連合軍側はすべて正しく、日本の散華者はみな犬死――そんなあり得ない戦争が、日本民族の手で強行されたなどと云っても誰も信じる者はあるまい。しかし、その関連さえわからないのでは占領政策の批判どころか、子女の質問にも答えられない。

やがて整理された戦史の出る日はあるであろうが、一人の物語作家として、とにかく、何のためにこの戦争は起り、どのような経過を辿って敗れ去ったか？　その荒筋だけでも読み易く書残しておくことは、この戦争に物語作家として従軍した私の責任であったと思い返して筆を執ったのがこれである。

それにもう一つ書き加えておきたいのは、私にとっては忘れることの出来ない先輩、吉川英治先生が実は、物語戦史的な作品を海軍側から委嘱されていた事実を私は知っていたからでも

あった。

おそらく先生もそれを書く気で始めから資料を蒐められていたと思う。しかし、その時にはまだ惨めな敗戦までは考えられず、占領軍の進駐するにおよんで、先生も又、一般国民と同様に、涙をのんで沈黙を余儀なくされたものと思う。

私が、昭和三十七年までこれを書き出さなかったのは、或いは先生が書き出されるのではないか……というためらいが私にあったからである。そうなれば、当時の日本人の張りつめた感情を、先生の麗筆で後世に遺すべきであり、その方が、数百万の犠牲者の慰霊になると信じたからだ。

その吉川先生も、恩師の長谷川先生も今は亡い。執筆中にお目にかかり、いろいろと当時のお話を伺いながらご鞭撻を頂いた諸先輩や将軍、提督の中からも十指に余る方々が亡くなられた。

しかし、それ等の諸霊や、三百万を超える有名無名の戦死者の悲痛な祈りが、生き残った人人の心に、同胞愛、祖国愛の火を燃やしつづけ、とにかく今日の復興をもたらしたものと私は信じている。

さて、こうして書きあげてみると、私の作品はひどく貧しい。書き止めたい事はまだたくさんあった。しかしながらこの民族未曾有の悲劇の荒筋だけは、当時の日本人の感情で、辛うじて伝え得たのではないかと思っている。

「――父よ、あなたは強かった！」

それは戦時中の軍歌の一節ながら、白欧文明に圧迫され続けた有色人種の、歴史の転機に際会して、否応なく引出された戦場での無名戦士の哀しさを語り尽して余りある一句であったと

思う。

それにしても何と高価な犠牲であったことか。この一戦だけで大西洋を除く殆んどすべての海域に、日本人はいまだにその遺骨を打ち捨てられたままになっている。故国へ戻ったのはほんの一部に過ぎまい。その痛みをひしひしと感じながら、改めて合掌して許しを乞いたい。

拙作ながら、筆を措くに当って、私は私にひそかにこう命ずる。

「――大本営報道班員山岡荘八　本日限りその職を解く」と。

（昭和四十六年九月二十九日　空中観音小堂に於いて）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

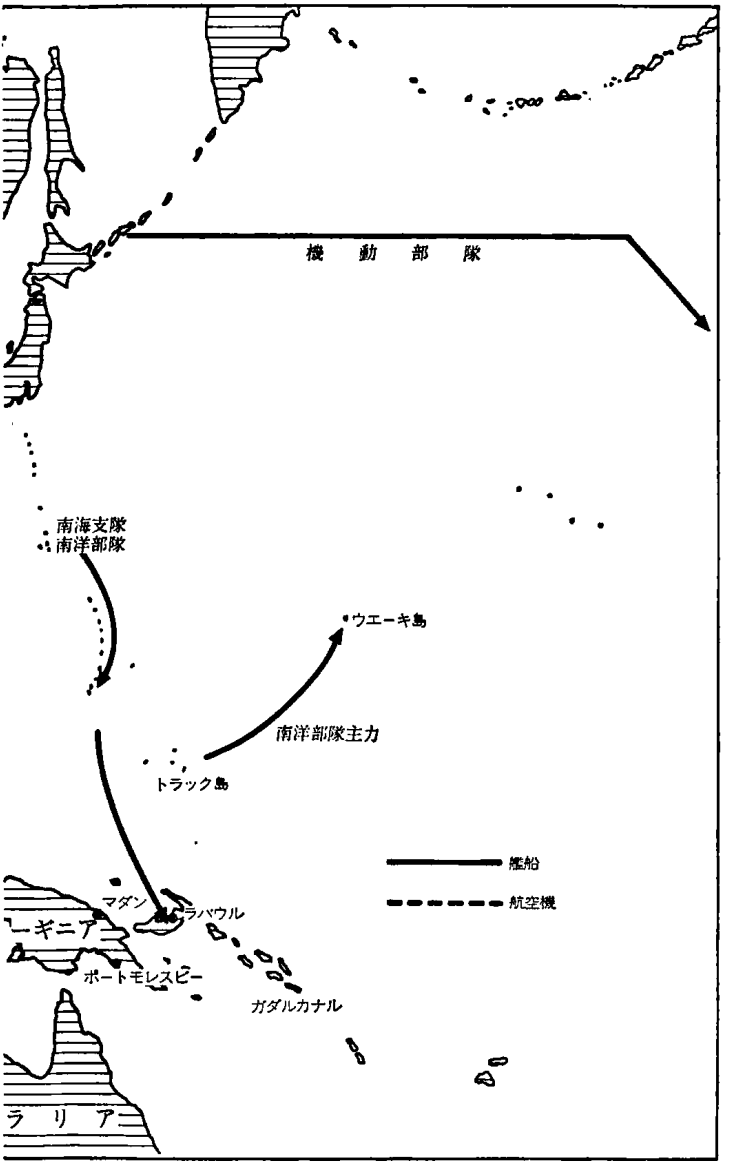
# 小説太平洋戦争

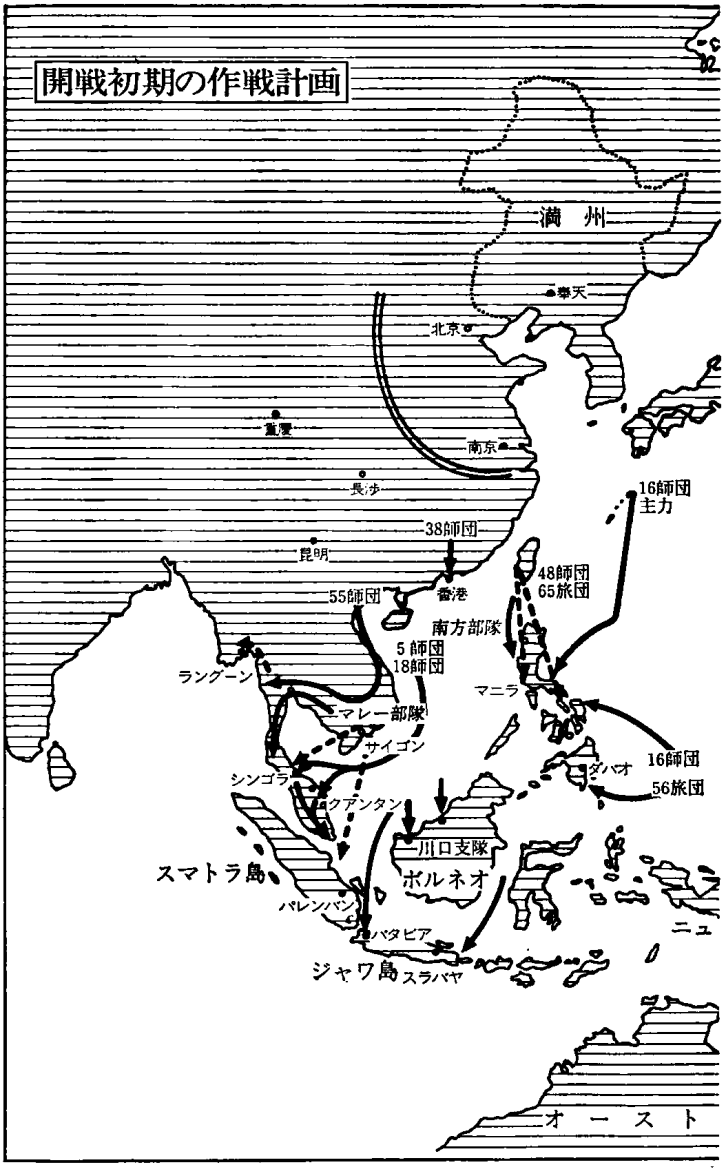
## 1

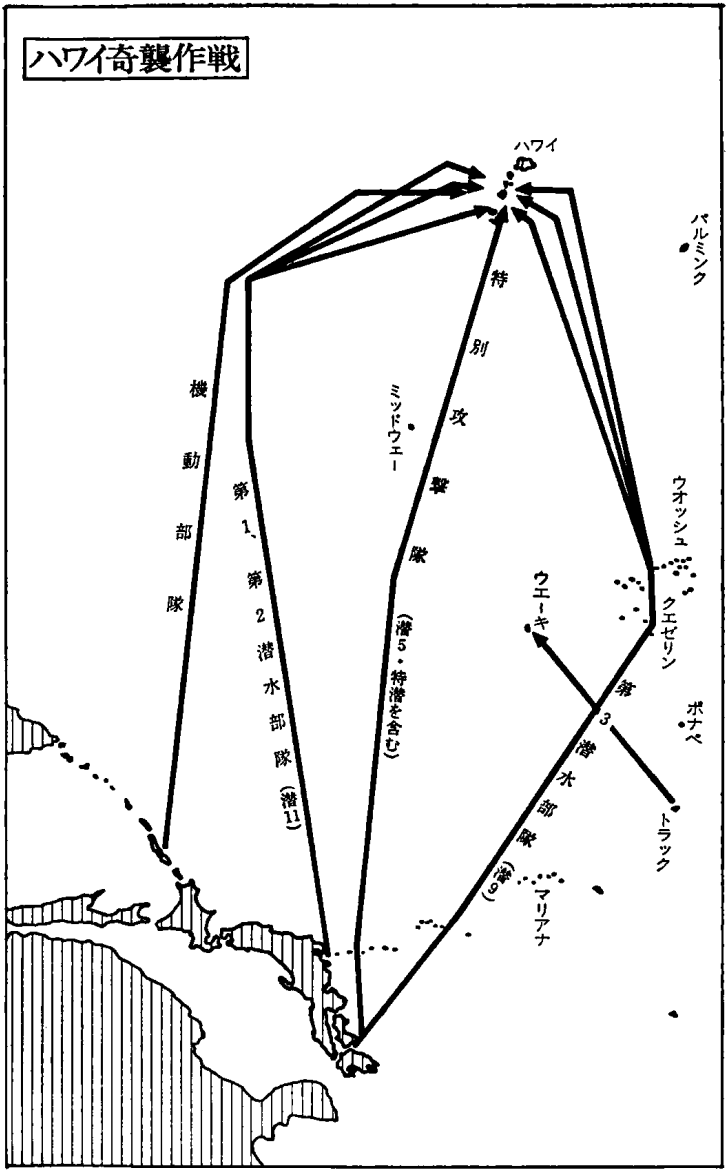
●十二月八日前後——目次

奇傑外相 19
投げられた手袋 40
同床異夢 60
運命の御前会議 80
近衛と東条 99
白紙還元の御諚 120
開戦前夜の苦悶 140
開戦前夜の外交 160
開戦前夜の民衆 181

山本五十六の眼 202
開戦前夜の海軍 222
十二月八日の前後 242
開戦の日の表情 262
マレー沖の火柱 281
シンガポール攻撃 300
山下奉文の面目 319
シンガポール決戦 339
勝利の虎 359


機　動　部　隊
南海支隊
南洋部隊
ウエーキ島
南洋部隊主力
トラック島
艦船
航空機
マダン
ラバウル
ーギニア
ポートモレスビー
ガダルカナル
ラ　リ　ア


開戦初期の作戦計画
満　州
奉天
北京
重慶
南京
長沙
16師団
主力
38師団
昆明
48師団
65旅団
55師団
香港
南方部隊
5師団
18師団
ラングーン
マニラ
マレー部隊
サイゴン
16師団
シンゴラ
ダバオ
56旅団
クアンタン
川口支隊
スマトラ島
ボルネオ
パレンバン
バタビア
ニュ
ジャワ島
スラバヤ
オ　ー　ス　ト




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo